

太平洋戦争終戦直前、
シンガポールで食用野生植物の図説冊子を作った
3人の植物学者(1 E. J. H. コーナー先生)

公益財団法人
日本植物調節剤研究協会
技術顧問
森田 弘彦

「救荒植物」とは、飢饉や災害などでの食糧不足を補うために利用された、主として雑草をはじめとする野生の植物を指す。元日本雑草学会会長の佐合隆一先生は、「人類が食糧飢餓に瀕するような事態に、食用にできる植物として古来伝えてきた『救荒植物』は、人類が残すべき植物としてリストアップしておく必要がある」との視点から「救荒雑草(2012)」を刊行された。同書では、「食べられる野草(陸軍獣医学校研究部 1943)」、「食べられる草木 上・下(水野葉舟 1942-43)」および朝鮮半島での「救荒植物と其の利用法(林泰治 1944)」が太平洋戦争末期の食糧不足での記録として紹介された。「食べられる野草」の「緒言」では野生植物利用の意義が以下のように記された。

「さて兵器と食糧は戦争に不可欠のもので、(中略)野草の活用こそ重大な意義が生じて来るのであつて、草は牛馬を飼ふべきもの、飢饉時にのみ利用すべきものである、といふやうな狭い考へに閉ぢこめられて等閑に附してはゐられない重大な問題である。」

太平洋戦争中の戦地では国内と同様に、雑草をはじめ野生植物に頼るほどの食糧不足に陥った。当時、日本の委任統治下にあった西太平洋のパラオ諸島(現:パラオ共和国)では、「・・・我々の日常生活に一日も缺くべからざる野菜類の

供給充分ならざる體驗と、時局の重大性に鑑み、本群島も遠からず自給自足の時期到来するものと信じ、・・・」で、「パラオ諸島に於ける救荒植物」のリストが作られた(岡部正義 1941)し、マラヤ(現:マレーシア・シンガポール)では「雑草のよもやま 3」で触れたように、昭南(ラッフルズ)植物園・博物館などから植物図のついた4種類の冊子が、筆者の知る限り1944年からわずか1年半の間に刊行された(図-1)。

- ① 食用野生動植物 昭南植物園・昭南博物館編纂 馬來軍政監部 昭和19(1944)年1月
- ② 馬來食用野生植物圖説 昭南博物館・昭南植物園編纂 馬來軍政監部 昭和19(1944)年1月
- ③ 南方圈有用植物圖説 第壹編藥用植物 編輯責任者渡邊清彦 馬來軍政監部 昭和19(1944)年8月
- ④ 南方圈有用植物圖説 第貳編食用植物 編輯責任者渡邊清彦 昭南植物園 昭和20(1945)年5月

③と④は「雑草のよもやま 3」で述べたように、コーナー・渡辺著の「図説 熱帯植物集成(1969)」のもとになった刊行物である。①の「食用野生動植物」は、シンガポール在住の方のブログ(<http://tropicalplant.air-nifty.com/top/cat6889318/index.html>)で「・・・こういった経緯で作られたものの、コピーだったのでした。序文を誰が書いたのかは

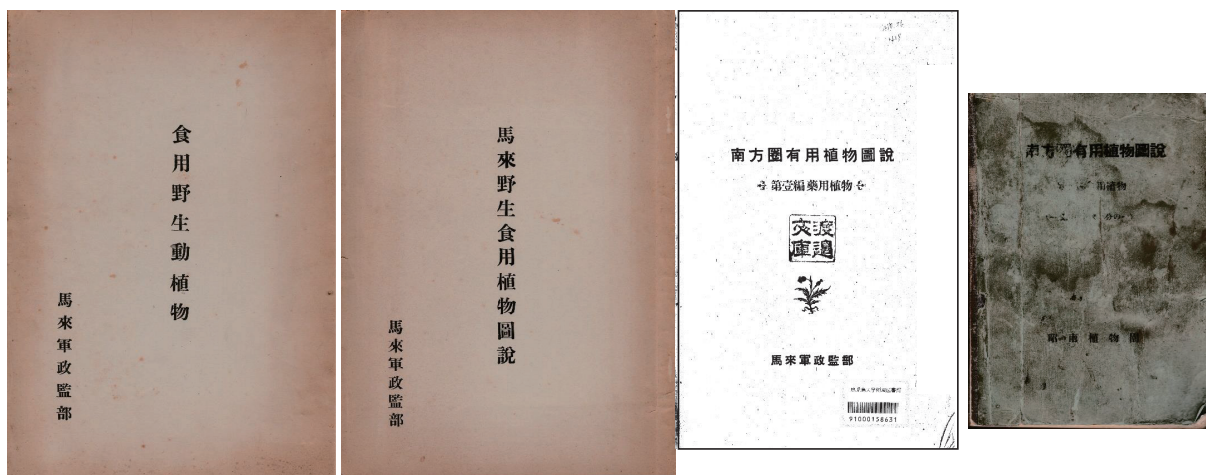
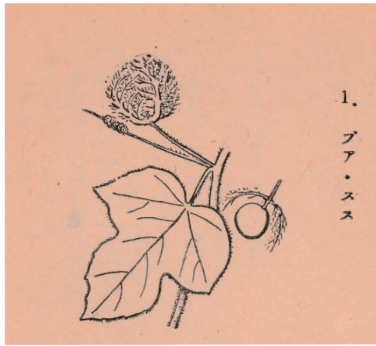


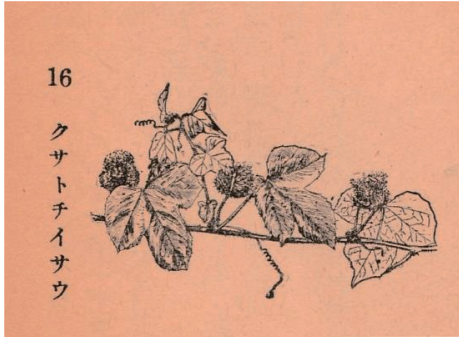
図-1 太平洋戦争末期にシンガポールで刊行された4種の食用野生植物の図説冊子



「食用野生動植物」：E.J.H.Corner 先生



「南方圏有用植物圖説」：渡辺清彦先生



「馬來用食用野生植物圖説」：郡場寛先生？



生態画像：タイ東北部スワナブヌにて（1999年8月）

図-2 シンガポールで3人の植物学者が描いた雑草、クサトケイソウ (*Passiflora foetida* L.) の図と生植物

書かれていません。でもとても興味深いのです。・・」と紹介されたように、コーナー先生が「思い出の昭南博物館 占領下シンガポールと徳川侯（石井美樹子訳 1982）」で次のように回想された冊子に該当する。

「昭和18年8月、侯爵（筆者注：マライ軍政監部最高顧問、昭南博物館総長：徳川義親侯爵）は、食糧事情が日増しに悪化してゆくのを憂慮して、マラヤの有用植物と動物に関する小冊子を日本語で出版することにした。秘書の大森嬢、パート（同：ウィリアム・パートウィッスル氏、水産関係の専門家）と私がある仕事を依頼され、パートは動物関係を、私が植物関係を担当した。素人でもすぐに識別できるように挿絵を入れた。挿絵は私たちの画いたもので、お世辞にも上手といえる代物ではなかったが、博物館から立派に出版された。これも数部図書館に入れられた。私は、今も一部手許に保存している。」

戦争の最後の時期に昭南博物館・植物園が野生植物利用の冊子を次々に発行できたのは、郡場寛博士、渡辺清彦博士、E. J. H. Corner 博士などの植物学者が、生物学者でもあった徳川義親侯爵のもとで活躍していたからに他ならない。南アメリカ原産で世界の熱帯に雑草として広く分布するクサトケイソウ (*Passiflora foetida* L.) は①、②および④で図説され、描き手の特徴がよくわかる（図-2）。これらの冊子の特徴と、

それに関わった植物学者の足跡をたどる。

1. 「食用野生動植物」

本冊子は全44ページで、「第一部 野生動物」にゾウ、トラ、サル、ニシキヘビ、オオコウモリ、カタツムリなど、「第二部 淡水魚」にコイやナマズの食べ方およびそれらの捕獲用具などを解説した後に、「第三部 食用植物」の「一 椰子」でココヤシ、サトウヤシ、アブラヤシ、サゴヤシおよびニツパヤシを紹介し、最後に「二 野生の果實」で「草類、蔓類、灌木類、樹木類」として41種を示した。ヤシ類には、植物全体の図と1ページ以上の詳細な解説文があり、果実類では実のついた小枝の図と、カタカナとアルファベットでのマレー語名、属名または種小名を含めた学名に続いて簡単な解説がある。蔓類にあるクサトケイソウでは以下のようなものである。

「ブア・スス (Buah Susu) 「*Passiflora*」

果は卵形で径2糎位。橙色又は黄色。軟かい毛の様な緑の袋に入っている。蔓には毛がある。葉は手の平位で三つに分かれてる。到る處にある。」

解説文はおそらくコーナー先生の英文を大森秘書が訳したのであろう。植物の図は、「挿絵は私たちの画いたもの」と

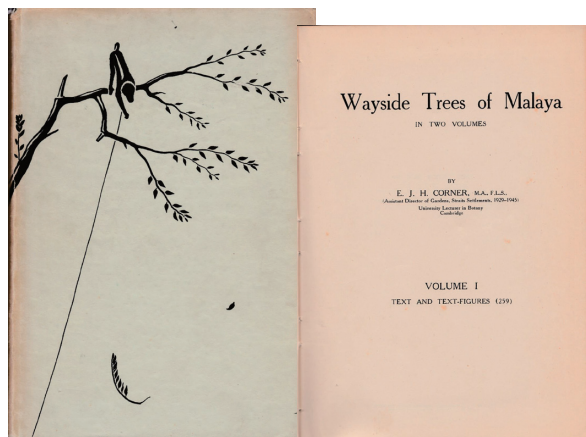


図-3 「ボタニカル・モンキー」を使う植物採集の場面を表紙に配した、コーナー先生の「Wayside Trees of Malaya (1951年の第2版)」

あるのでコーナー先生の手になるものである。先生は日本軍の侵攻前の1940年に「Wayside Trees of Malaya」をシンガポールで出版した。道路から見える樹木約950種を解説と写真の2巻に分けて示したもので、とかく背が高くて地面から細部の観察の難しい熱帯の樹木に関して、落下した小枝、花、果実などを利用して同定し、熱帯の自然を理解することを目的とした。このため、第1巻の解説では花や果実のスケッチが多数配置された。先生は、ヤシの実を採るサルを訓練してボタニカル・モンキーとし、高木の枝などを採集したことで知られているが、この本の表紙にはその様子が描かれた(1951年の第2版、図-3)。「食用野生動植物」には、「Wayside Trees of Malaya」から転用された、または加工された植物図がいくつかある(図-4)ので、先生の回想が裏付けられる。

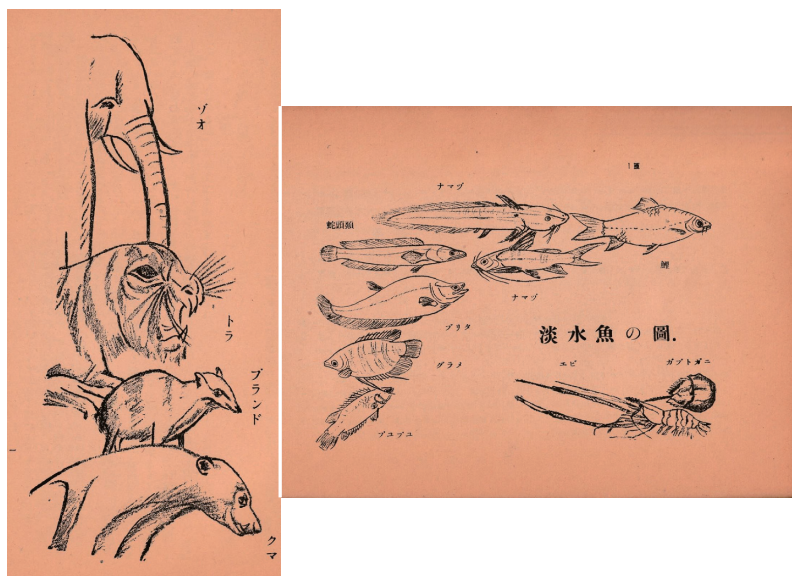


図-5 「食用野生動植物」での「野生動物」と「淡水魚」の挿図

Wayside trees of Malaya

食用野生動植物

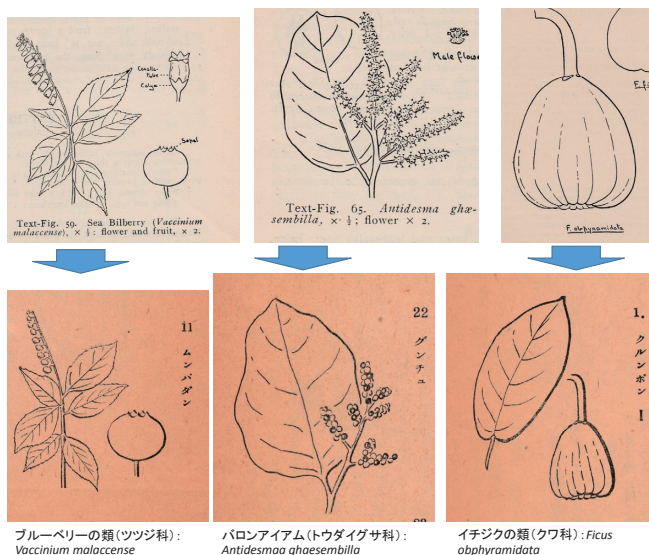


図-4 「Wayside Trees of Malaya」から「食用野生動植物」に転用、加工されたコーナー先生の植物画

動物については、上野動物園の園長を務めた古賀忠道博士が昭南博物館にいたことから、何らかの形で関与されたかもしれないが、水産の専門家であったW. バートウィッスル氏の担当とあるので、挿図も同氏によるものであろう(図-5)。哺乳類、爬虫類、カエル、カタツムリ、淡水魚が図入りで扱われているが、なぜか鳥類はない。例えば、「虎(ハリマウ)：若い虎の肉は割合うまい。トラテキ・鋤焼いづれもよろしい。心臓、肝臓、生殖器などは強精媚薬として尊重される。殊に髭の黒焼きは効能顕著なりといふ。」とあって、「野生の果實」に比べると、動物の食べ方については具体的な体験が多く記されている。

「食用野生動植物」の「序」は以下のように、前掲の陸軍獣医学学校の「食べられる野草」のそれに比べて穏やかな書き出しである。

「・・・一般に人々が食糧としてゐる牛・山羊・鶏・魚等、又米・麥を初め野菜・果物の外に野生の動物、植物で手近にあり又普通目に觸れるもので食用になる物は澤山ある。考へたり工夫したりすることにより食物に不自由するといふことはまづないものである。たゞ、今迄は贅澤に馴れたのと食べつけないので判断がつかず、不安で尻込みしてゐたのにすぎないのである。この自然に與へられた恵を知らないで、或は捨て顧みないでゐるのは勿体ないことである。出来るだけ、それを利用しなければいけない・・・」

「捕虜」の身であったイギリス人の動・植物学者が、博物館・植物園の場で日本人向けの情報を提供したことは、異例なことであつたらう。(つづく)